

「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」TEMDEC (Telemedicine Development Center of Asia)活動報告：第7巻

清水, 周次
九州大学病院

中島, 直樹
九州大学病院

<https://doi.org/10.15017/19698>

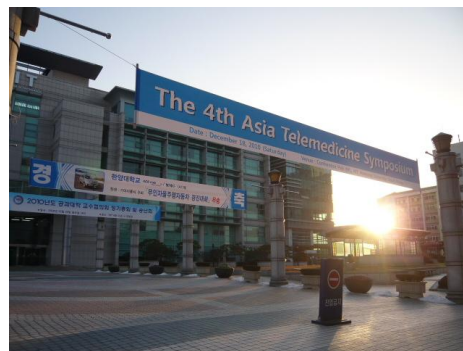
出版情報：「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」 TEMDEC活動報告. 7, 2011-03. TEMDEC事務局
バージョン：
権利関係：

3) 写真レポート

年に1回、定期的に開催されているアジア遠隔医療シンポジウムの第4回目の会合が、韓国は漢陽大学で開催された。

前日までの韓国の気温は氷点下20度を超え、積雪のため日本からの便も遅滞していた。

しかし、開催当日は天気も晴れ渡り、シンポジウムの成功を祝うようであった。



会場となった漢陽大学

医療ワーキンググループ (Medical WG)

シンポジウム前日には、MedicalWGの主要メンバーがホテルプレジデントに一同に介し、今後のイベントに関する詳細な打ち合わせを行った。Medical WGでは、本シンポジウムの他に、半年に1回開催される APAN (Asia Pacific Advanced Network) において、テレカンファレンスのデモを行っており、今回のWGでは、次回 APAN (2011/2 香港開催) の詳細な内容を打ち合わせた。



Medical WG の様子

シンポジウム当日

シンポジウムは、漢陽大学の HIT (Hanyang Institute of Technology) のカンファレンスホールで行われた。会場は、医療とエンジニアの2つのセッションが隣り合った別会場で同時進行する形で行われた。



会場受付

医療セッション

医療セッションでは各国の関係者が積極的に発表を行った。清華大学(中国)が作成した DVTS-Plus の紹介をはじめ、新規分野、新規参入施設の紹介、本年度の活動履歴、今後の計画などが積極的に話し合われた。



発表する中国清華大学の Prof. Bao

エンジニアセッション

エンジニアセッションでは、各施設が、それぞれの施設でのセットアップ状況を紹介し、設定技術の共有を行った。また、如何にして映像音声のクオリティを向上するかを議論した。折しも、北朝鮮と韓国の政治的緊張が高まった時期であったため、一部参加予定者が所属の方針等により現地入りすることができず、テレビ会議での接続を行うケースもあった。こういったケースでも柔軟に対応できるところは、本シンポジウムの強みであると考えられる。

閉会

シンポジウム終了後は、医療、エンジニアの両方の参加者が一同に集り、記念撮影を行った。昨年、一昨年と比べると年々参加者が増加しているのがわかる。

閉会后

閉会后は、懇親会が行われた。各国の参加者が集合し、シンポジウム終了後も熱い議論が交わされた。本シンポジウムは、テレカンファレンスをメインテーマにした物であるが、テレカンファレンスを行えば行うほど、直に会う Face to Face の大切さをよりいっそう感じる。



熱心な討議が行われる



エンジニアセッション



閉会后も熱い議論が交わされる



閉会式後の記念撮影の様子